第4章

特徴的な学校の取組の紹介

児童生徒の学力を大きく伸ばした学校の実践を紹介します。

各学校において、本章で掲載されている児童生徒の学力の伸びを引き出した効果的な取組を、今後の取組の参考としてお役立てください。

今年度は、以下の８校の取組を紹介します。

上尾市立平方北小学校　越生町立梅園小学校
神川町立青柳小学校　杉戸町立泉小学校
桶川市立桶川東中学校　川越市立城南中学校
深谷市立川本中学校　春日部市立葛飾中学校

上尾市立平方北小学校の取組

1　本校の概要

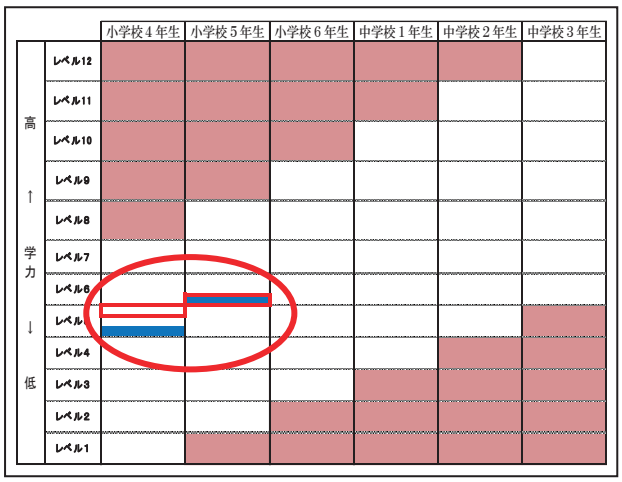
本校は上尾市の西に位置し、豊かな自然に恵まれた小規模校である。本校はウェルビーイングの考えを共通理解することで、心理的安全性の高いチームを構築し、目指す学校像「笑顔・あいさつ・思いやりがあふれる楽しい学校」の実現と、本校の重点課題である「学力向上」に向け、個々の教員の力を主体的に発揮するとともに、対話的・協働的に一丸となって取り組んでいる。また、令和３年度から２年間、上尾市教育委員会から学習指導（国語科・算数科）の研究委嘱を受け、「確かな学力を身に付け、わかる楽しさを味わう児童の育成～基礎的な知識・技能の定着を図る学習指導を通して～」をテーマに掲げ、「分かることと、学ぶことの楽しさ」を味わわせる学習環境づくりや指導方法の工夫改善の研究に取り組んでいる。

2　令和３・４年度の結果

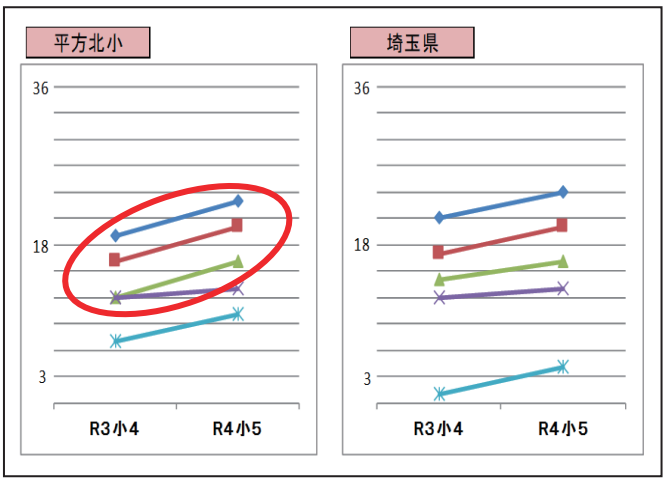
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○学力の伸びが県平均を２上回るとともに、学力のレベルが県平均と同程度に向上した。
○全体的に学力の伸びが見られるが、中位層から上位層の伸びが特に大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　学習の基礎・基本を定着させるための授業改善の工夫

①思考の流れが分かる構造的な板書による課題の焦点化②テンポのよいメリハリのある授業展開の工夫③問題解決的な授業を展開するための視点の明確化とノートの使い方の統一④毎時間の授業における習熟の時間の確保⑤学習内容と具体物（半具体物）や体験活動とを関連付けた実感を伴う授業の実施。

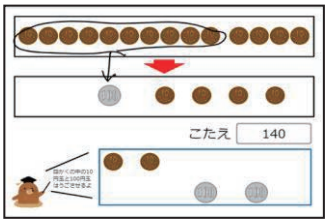
イ　学習に対する達成感と主体性を高めるための工夫

①習熟度に応じた問題に取り組み、学習内容の習熟を図るための「かずのじかん（業前活動）」の設定②「ひらっき一算数プリント（いつでも自由に使えるプリント）」の活用③「算数コーナー（長さや形・量感を体験する場）」の設置④スクールタクト（※）を活用したデジタル教材の作成と活用

【かずのじかん】

【ひらっき一算数プリント】

【算数コーナー】



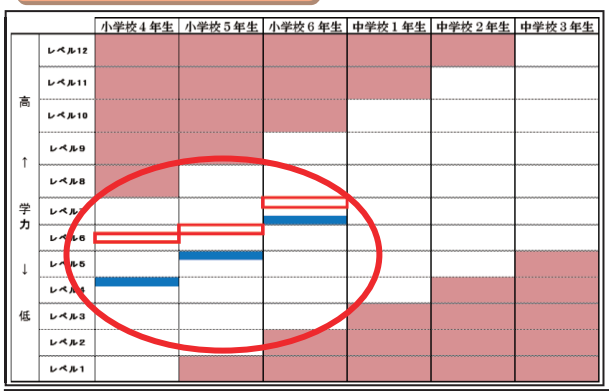
【スクールタクトの活用】

※ スクールタクト…授業支援クラウドサービス

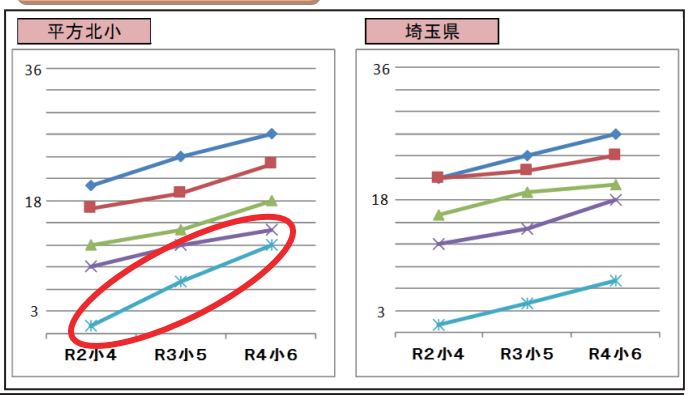
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○学力の伸びが県平均を１上回るとともに、学力のレベルについては、県平均との差が縮まっている。
○どの学力層の児童も学力を伸ばしているが、特に下位層の伸びが大きい。

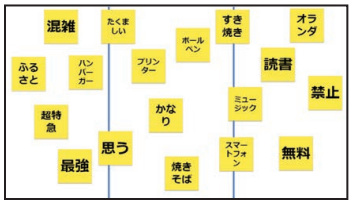
（２）伸びを引き出した効果的な取組

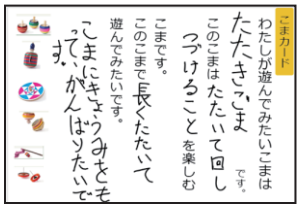
ア　言葉を大切にする指導の工夫

①児童が自分の考えを言語化し、伝え合う活動を充実させるための話型の作成と活用②語彙力を育てるための「短文作り」の実施③国語辞典やタブレット端末を活用した言葉の意味を調べる活動の充実④教師が児童にとって大きな言語環境になることを意識した指導の実施⑤丁寧な言葉（「～です。～ます。」）を使わせ、文章で話をする力、思いを豊かに表現できる力を育てる指導の実施

イ　言語環境を充実させるための工夫

①「ことばのじかん（朝の活動）」を活用した視写の取組の実施②「国語コーナー」の設置③学校図書館支援員による読み聞かせの実施④接続語、指示語の一覧表の作成と活用⑤Ｊａｍｂｏａｒｄやスクールタクトを活用したデジタル教材の作成と活用





【学校図書館支援員やＡＬＴによる読み聞かせ】【Ｊａｍｂｏａｒｄの活用】【スクールタクトの活用】

学校全体での取組

ア　児童一人一人を大切にした学級経営と、自己有用感を高めさせることで学習意欲を高める

学級内の人間関係をほぐし、温かく一人一人が伸び伸びと活躍できる学級をつくることを通して学習意欲を高めるために、次のことに取り組んだ。①児童の反応や作成物等を基にした躓きの詳細な分析と、それに対応する発問・支援方法等の工夫②児童の意思決定場面を多く取り入れるなど、主体性を重視した学習活動の充実③特別活動（学級会）を基盤とした学級経営の充実④一人一人に役割をもたせ、自己有用感を味わわせる係活動や学校行事の実施。

イ　児童が気持ちよく学習に集中したり、学びの意欲を高めたりする環境づくり

児童が学ぶ意欲を高めるために、次の取組を行い「学びたくなる環境づくり」を行った。①ＵＤ化を意識した教室（シンプルで誰もが落ち着いて学べる）環境づくり②校内の森やビオトープを活用し、自然体験から得た感動や発見を通して学びを深め、心の安定を図る環境づくり。

ウ　児童・保護者との信頼関係を構築した学級経営

信頼関係の構築を目的として次のことに取り組むことで、人間関係を構築し、安心して学べる環境づくりに努めた。①児童理解を深める（児童の興味・関心を的確に捉え、会話を広げたり、休み時間に一緒に遊んだりする等）。②保護者との連絡を密にする（ＨＰでクラスの様子をこまめに配信する等）。

エ　道徳教育を中心とした心の育成

道徳教育は、学びに向かうために必要な、素直で意欲的な心を耕す上でとても重要であることから、全校道徳授業参観・研究協議や管理職による道徳授業参観等を行い意識を高め、授業力向上を図っている。

越生町立梅園小学校の取組

１　本校の概要

本校は、埼玉県のほぼ中央に位置し、開校１４９周年を迎える。児童数８６名、学級数８の各学年単級の小規模校である。学校教育目標を受け、「いつでも元気、本気、根気の梅園小　きれいに　ていねいに　うつくしく」を合言葉（スローガン）に、学校・家庭・地域・越生町が連携し、「夢や希望を自分の言葉で語れる子ども」の育成を目指している。また、町全体で９年間を見通した小中一貫教育に力を注いでいる。１人１人の児童に寄り添った教育をさらに推進するため、全学級で特別支援教育の要素を取り入れ、ＵＤの視点による授業の工夫を心がけている。あわせて、塾などに通う児童も少ないため家庭学習の啓発・定着にも努めている。

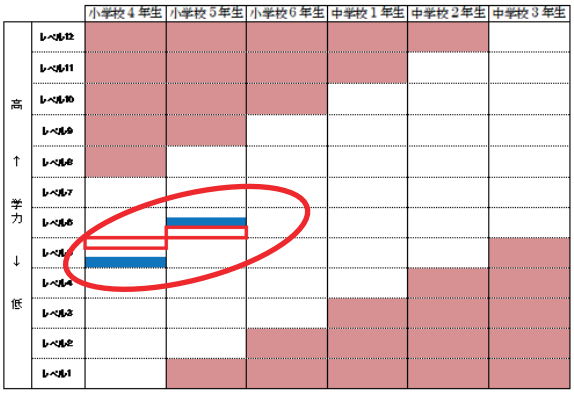
令和２年度からの研究課題を「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子の育成」として、日々の授業の充実を目指し、学校研究の成果を引継ぎ、基礎学力の定着と学力向上を目指している。

２　令和３・４年度の結果

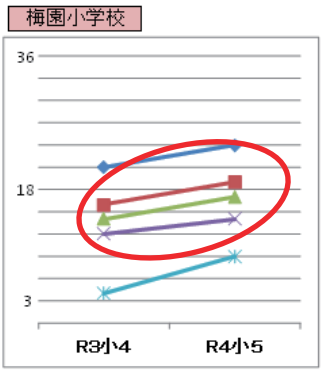
小学校４年生→小学校５年生の取組

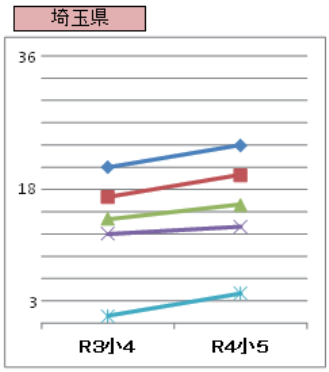
（１）学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況





○小４から小５にかけて、学力のレベルが４上昇し、県平均を１上回った。
○全体的に学力が伸びているが、特に、下位、中位層の学力の伸びが大きい。

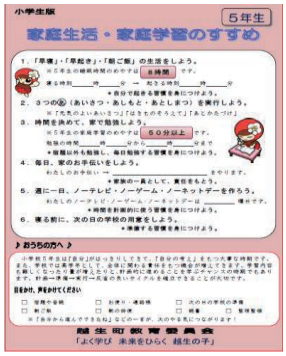
（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　教師の言葉による情意面への働きかけ

児童１人１人の特性を理解した上での、考えられる適切な声かけを意識した。「誉めて・認めて・伸ばす」の実践。

イ　ペア学習・グループ学習の実践

教師主導型の授業からの脱却を目指し、意図的にペアやグループ学習の機会を増やした。学びがどこでつまずき、どこで深まったかを意識したり教師の役割の確認をしたりした授業改善・工夫の取組。



ウ　ＩＣＴ機器端末の積極的活用

越生町は、ＩＣＴ環境が早くから充実しているため、日頃から各教科・領域で意図的にタブレットを活用した授業を展開。

エ　タブレットドリルの取組

１２月に取り組む町独自の学力調査を実施。調査会社提供のタブレットドリルを朝の算数タイム隙間時間で繰り返し実施。

オ　家庭学習の定着

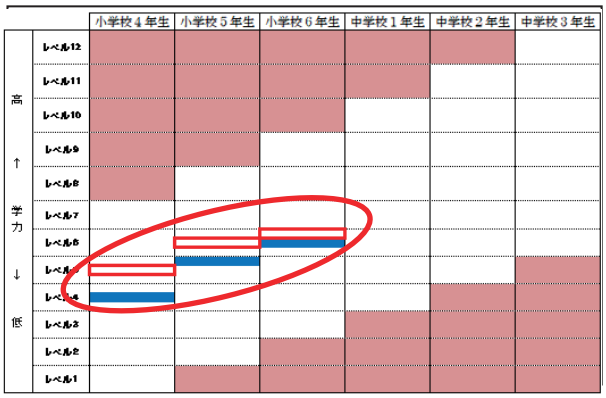
年度当初・中間、年度末における家庭学習リーフレットによる定期的な啓発とアンケートによる

定着の確認。

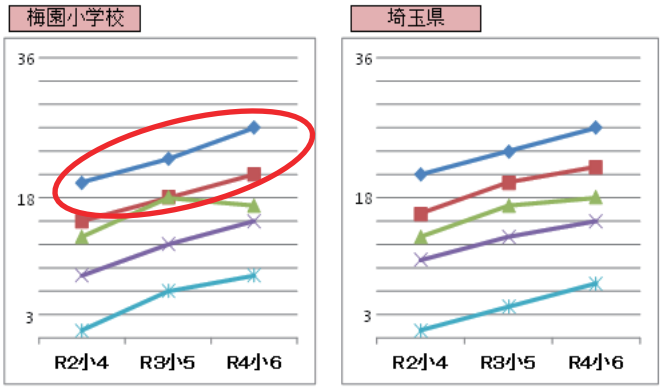
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○学力レベルが県より１上回るとともに、学力の伸びが県平均に近づいている。
○学力を伸ばした児童の割合（91.7%）が高く、特に上位層が伸びている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　自分事として捉える問題場面の工夫

児童が解決したいと思う問題場面を設定し、主体的に学習できる工夫を行った。例えば、人口密度の学習では、「越生町」の人口密度を様々な市町村と比較、ランキングにまとめる活動を行った。求める人口密度を１㎢に見立てた一辺が 20 ㎝の正方形の中に、丸シールを貼り視覚化する活動を行い、量感を伴った理解へとつなげた。

学力を伸ばした児童の割合（%）		
	国語	算数
埼玉県	76.9	67.5
梅園小	100	91.7

イ　自らの考えを伝え合う活動の充実

自力解決後には、自らの考えについて他の児童と意見交流し、伝え合う時間を十分に確保した。教師が指名して順番に発表するような形式ではなく、「伝えたい人に何度でも伝える。」「相手の説明を批判的に聞き、分からないことがあったら質問する。」「自力解決できなかったら、自分がわかる方法を見つける。」といった視点をもって行った。この活動後には、伝え聞いた友達の意見を発表する場を設けた。これにより、話し手はさらに詳しく説明し、聞き手は相手の考えを理解しようとする姿勢が強くなり、理解が深まった。

学校全体での取組

ア　算数の学習の進め方の統一

梅小スタンダードの実践「基礎プリント⇒問題設定⇒課題把握⇒見通し⇒自力解決⇒練り上げ⇒まとめ⇒練習問題⇒振り返りの流れの徹底。毎年、授業の流れが大きく変わることがないよう、どの教員が担任でも大枠の流れに沿って進め、児童が安心して学べる授業作りの構築。

イ　外部指導者による俯瞰

数年単位で同じ指導者に客観的・継続的に児童や教師の変容の様子を見ていただき、指導・助言を受けることで、確実な成長を目指す取組。

ウ　各種調査分析による弱点の可視化

各種調査結果を受けて、特に、弱点・苦手とする項目をピックアップし、復習の時間の設定。あわせて、指導書や年間指導計画に印や書き込みを入れることで、翌年の担任等が認識できるよう可視化。

エ　県学力向上ワークシートの計画的な取組

小中連携の観点から町内３校（梅園小学校・越生小学校・越生中学校）の課題について、町学力向上推進委員会で県教育局作成の学力向上ワークシート内から選定した国語・算数の問題を、タブレットを通じて配信し、全学年が計画に基づいて取り組むことで基礎学力の定着を図り、同時にＩＣＴ操作への慣れも目指す実践。

神川町立青柳小学校の取組

１　本校の概要

本校は、埼玉県北部に位置する、開校１４９周年を迎える学校である。全校児童は１７７人、学級数９の小規模校である。

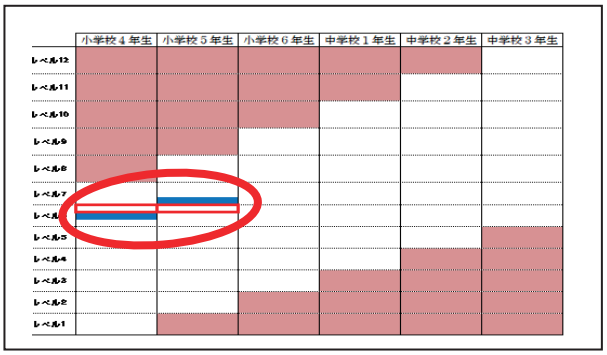
学校目標「なかよく　かしこく　たくましく」の下、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。今年度は、「主体的に学び合い、確かな学力を身に付けた児童の育成～国語科における『読むこと・書くこと』の指導の工夫」を研究主題に、主に国語の説明文教材を中心に、授業を通して学力の向上を推進している。

２　令和３・４年度の結果

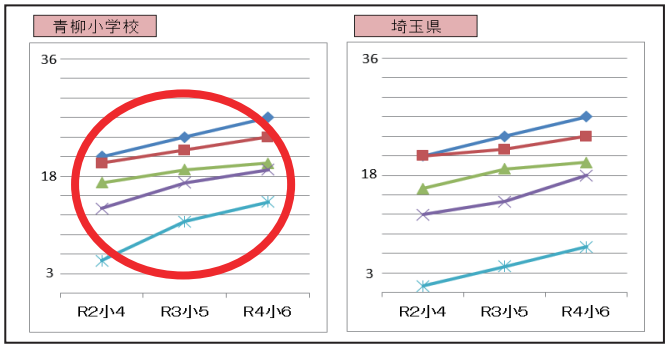
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



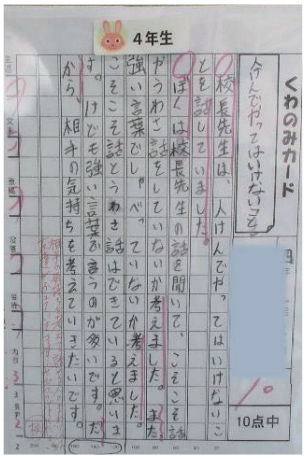
学力の伸びの状況



○　中位層を中心にどの学力層も学力が向上している。

○　学力を伸ばした児童が７４．２%で、埼玉県平均の５５．０%を上回っている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組



ア　見通しをもたせる導入の工夫

各単元の導入時に単元の目標や最終的な成果物（モデル）を示し、児童に目的意識をもたせて毎時間の授業を実施している。

イ　ユニット学習とタブレット学習の融合

ユニット学習という少人数による話合い活動を各授業で実施している。その中でタブレットのアプリケーションや図などを有効に活用して、友達と考えを比較したり、交流したりする活動を行っている。

ウ　コラムタイム（金曜日の朝の時間）

毎週、新聞記事を読み、その内容の要約と自分の意見とを段落を分けて、記入する取組を実施している。今年度からは、隔週で宿題として取り組ませることで、家庭との連携も図っている。

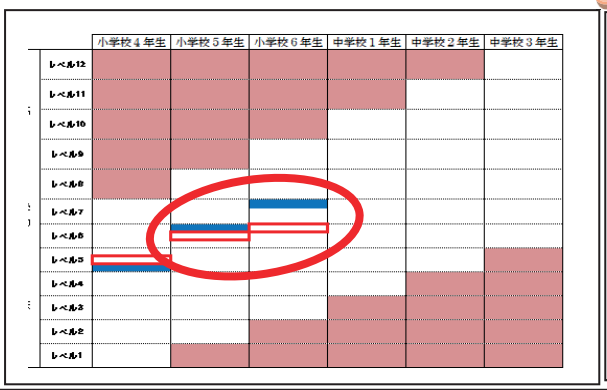
エ　くわのみカード（全校朝会）

全校朝会の校長講話を聴き、講話の内容と自分の意見とを段落を分けて、記入する取組を実施している。段落分けに加えて、既習漢字の使用や、接続語の活用などを指導のポイントとしている。

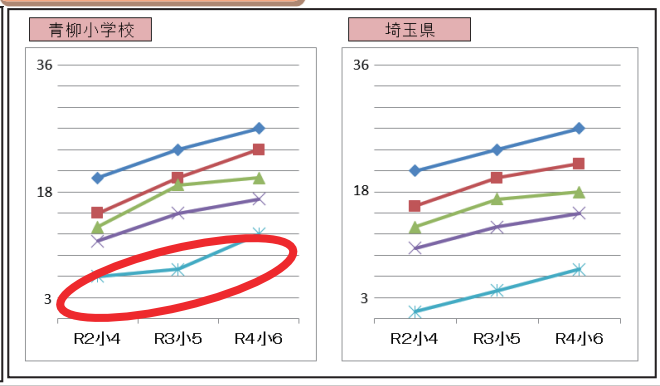
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　学力を伸ばした児童の割合は、８１．８%で、県の６７．１%を上回っている。

○　どの学力層も学力が向上している。特に下位層の伸びが大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　学習意欲を高める導入の工夫

各単元の導入時にその単元に関係する活用問題を自力で解き、何が分かれば解けるようになるのか、児童に目的意識をもたせてから、毎時間の授業を実施している。

イ　構造的なノート指導案作成と授業後の検証

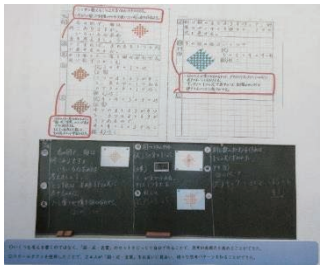
授業のポイントを３つ設けた構造的なノート指導案を作成している。授業後は、予め設けた３つのポイントを中心に検証を行っている。ノート指導案と検証結果をともに Google Drive に保存し、教職員が相互に閲覧できるようにしている。

ウ　ＴＴタイム（火曜日の清掃の時間）

毎週火曜日は清掃の時間に替えてＴＴタイムを実施している。全職員が全児童を指導する時間とし、１～３年生はマス計算による四則計算の定着、４～６年生はタブレットを活用し、個別最適な学習（主に復習シート等）を実施している。

エ　チャレンジタイム（水曜日の朝の時間）

毎週金曜日に宿題に出した復習問題やコバトン問題等を翌週の水曜日にテストを実施して定着の確認を行う。



構造的なノート指導案

学校全体での取組

ア　国語・算数の市販テストの統一

国語・算数の市販テストの選択に、学年ごとのばらつきがみられた。このため、前年度のうちに校内で活用力をみる問題の有無などをポイントに、全校で統一したものを選択し、共通した指導ができるようにした。また、返却時の解説と再テストを定着ができるまで継続している。

イ　指導のズレの解消　「文書名人　５つの技」

コラムタイム・くわのみカードなどの書く活動では、教員の指導や評価にブレが生じやすい。このため、予め全校で評価のポイントをまとめた「文章名人　５つの技」を作成・活用し、指導や評価のブレがないよう徹底している。

ウ　「青小っ子できたよタイム」・「学期末テスト」の実施

毎学期末の５日間、５時間目を「青小っ子できたよタイム」とし、校内全体で各学期の学習の定着を図っている。児童には確認テストの実施を予告し、家庭と連携して復習を進めていく。実施する確認テストは、ＣＲＴや全学調、県学調の分析から児童が苦手とする分野の類似問題を出題する。問題は、復習シート、コバトン問題集などを参考に担任外の職員が分担して作成している。

エ　家庭との連携強化

家庭学習や読書の習慣化が学校評価（保護者）での課題であった。このため、全学年の懇談会で、それぞれの家庭での取組や工夫について保護者同士が情報共有できるよう小グループによる話合いを実施している。

杉戸町立泉小学校の取組

1　本校の概要

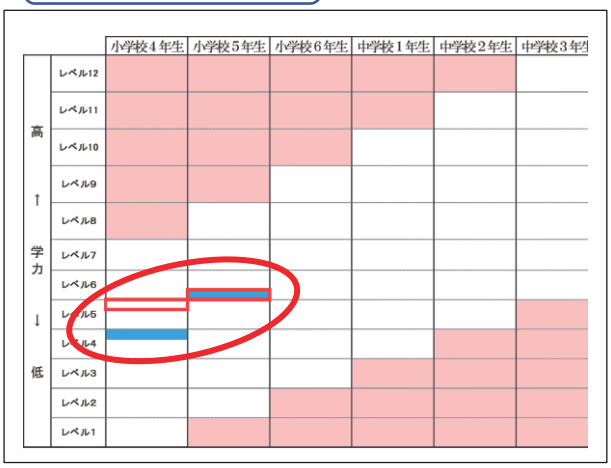
本校は杉戸町の東部に位置し、開校 54 年目を迎える。全校児童数 116 名、学級数８の小規模校である。学校教育目標「心豊かで　たくましい子」のもと、「いつも元気で　すすんで学び　みんなにやさしい　いずみの子」を合言葉に、全教職員が一丸となり教育活動に取り組んでいる。昨年度からの研究課題を「自ら進んで学びに向かう児童の育成」と設定し、算数科を主としてユニバーサルデザインを視点とした授業研究を中心に学力向上を進めている。

2　令和３・４年度の結果

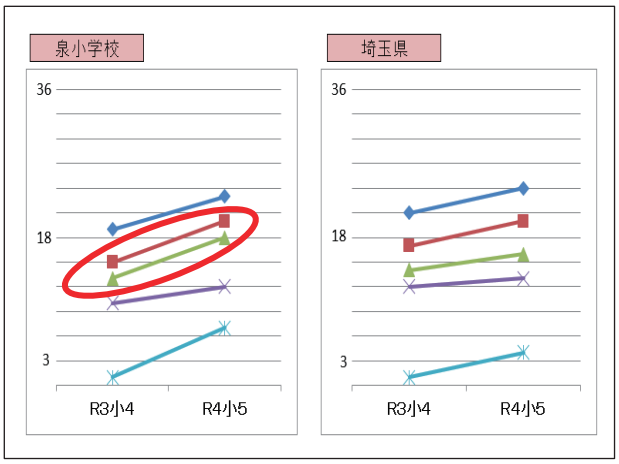
小学校４年生→小学校５年生の取組

（１）　学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○小４から小５にかけて、学力のレベルが４上昇し、県平均の伸びを上回っている。
○学力の伸びは、全ての層で順調に伸びている。特に、中位層の伸びが大きい。

（２）　伸びを引き出した効果的な取組

ア　ＴＴ（ティーム・ティーチング）及び少人数指導

算数の学習は、３年生から原則ＴＴで授業を展開している。Ｔ１・Ｔ２は、単元の特性や児童の実態を考慮しながら役割を分担し、主にＴ２が個別指導にあたり、児童一人一人の習熟度を高めている。単元の内容や学習場面によっては少人数指導も行っている。小規模であるという利点を生かし、個別指導の時間を十分に確保し、充実させている。

また、授業の終末には学習に対する振り返りを“算数日記”として書き、素直に自己評価すると共に、日常生活との接続を意識させている。また、その日記に対する教師の称賛や励まし、アドバイスで、学級全体の学びの質の向上を図っている。

イ　ＩＣＴの活用

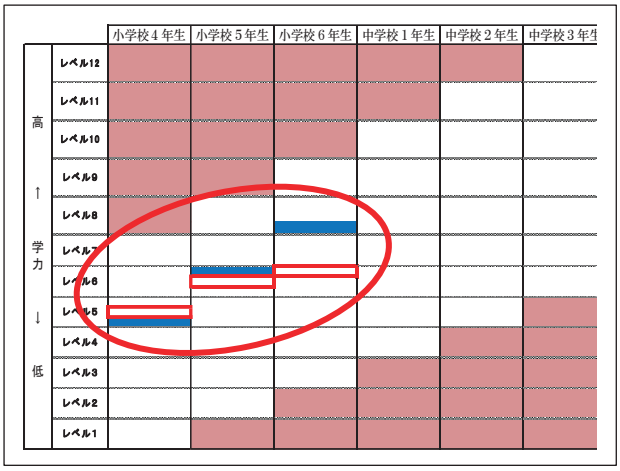
自力解決した学びの過程を児童のタブレット端末から教師へ送信させ、学級全員が共有できるように大画面で提示しながら説明させている。個とグループ等（集団）での学びを連動させ、学習内容の理解を深めることで、最終的には個の学びの質を高められるよう取り組んでいる。

また、宿題等の家庭での学習課題を一斉配信し、内容によってはオンラインでの提出を行い、その日のうちに採点や評価を行っている。誤答の多い部分については、翌日に指導したり、別の練習問題に取り組ませたりしながら、児童の「できた」体験を重視した学びの充実を図っている。

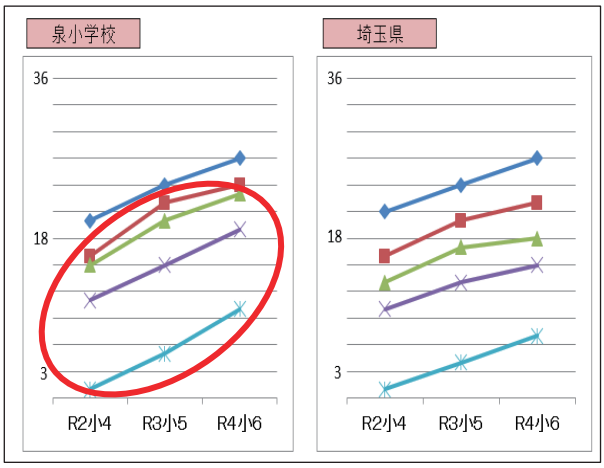
小学校５年生→小学校６年生の取組

（１）　学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化

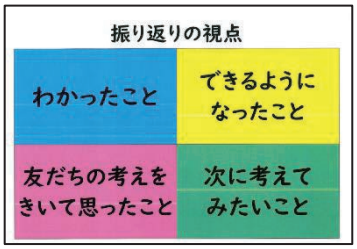


学力の伸びの状況



○小４から小６にかけて、それぞれ学力のレベルが５～４上昇し、県平均の伸びを上回っている。
○学力の伸びは、全ての層で順調に伸びている。特に、中位層から下位層の伸びが大きい。

（２）　伸びを引き出した効果的な取組



ア　ＴＴ（ティーム・ティーチング）及び少人数指導

第６学年も第５学年と同様にＴＴや少人数指導で授業を行い、習熟度を高めている。当該学年児童はＴＴや少人数指導で、個別指導を丁寧に着実に取り組んできた３年間の積み重ねが本年度の成果として表れている。小規模の利点を生かし、児童の実態に即した個別指導を積み重ねることで児童の学習への自信がつき、学力向上に結び付いた。

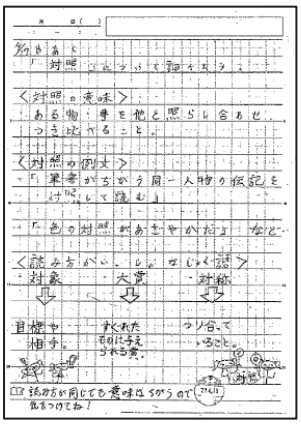
また、“振り返り”の視点を明確にすることで、学級全体が同じ方向で学習に向き合い、同じ歩調で学びを積み重ねることができている。

イ　計算ドリル、練習問題を活用した教師の丁寧な見取り

計算ドリルや練習問題は、教師が支援をしながら児童一人一人が最後まで自力で解決できるよう繰り返し取り組んでいる。未実施や未提出がないように確認しながら、教師が最後まで丁寧に指導を積み重ねることで、習熟度を高めた。

また、隙間時間を利用してＩＣＴを活用した練習問題にも取り組むことで、学びに対する興味・関心や自信の向上を目指している。

学校全体での取組



ア　授業スタンダードの実践

杉戸町では主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善へとつなげるために、“杉戸町授業スタンダード”を策定した。本校においても全ての学年・全ての教科等で、このスタンダードをベースとした授業を展開し、学びの充実に取り組んでいる。

イ　スキルアップタイムの実施

週３回、業前の時間 15 分間を利用して練習問題やミニテスト等を行っている。

毎学期末には“計算ドリル検定”を実施し、全員 100 点を目指して取り組んでいる。

ウ　家庭学習（自主学習）の充実

家庭学習（自主学習）を充実させるために、「家庭学習事例集」を全家庭に配布している。学年ごとに、すばらしい取組をしている児童のノートをコメント入りで紹介し、児童の意欲の向上と共に保護者への啓発を図っている。

桶川市立桶川東中学校の取組

1　本校の概要

本校は桶川市の東部に位置し、開校 52 周年目を迎えた、全校生徒数は 409 人、学級数 12 の中規模校である。

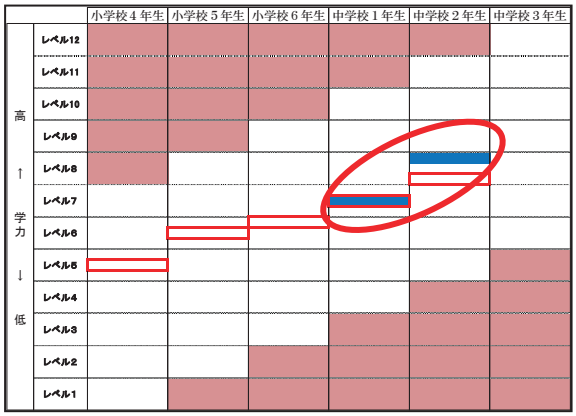
学校教育目標「明るいあいさつ、輝くひとみ、みなぎる力」のもと、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。令和元年度からの研究課題を「『できた、わかった、楽しい』を味わわせる学習指導の質的改善 ～主体的・対話的で深い学びを通して～」と設定し、授業研究を中心に進めている。

2　令和３・４年度の結果

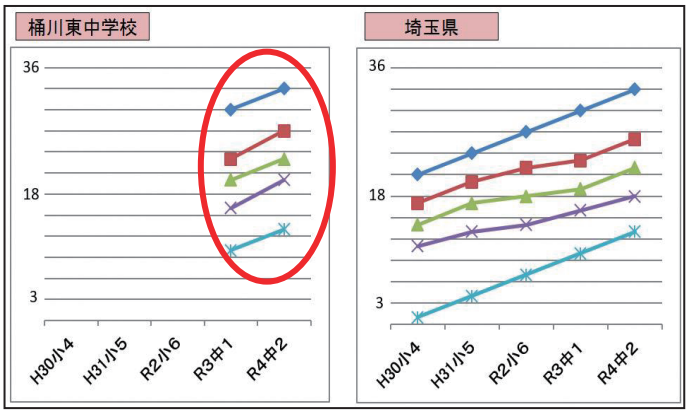
中学校１年生→中学校２年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　１学年時は県平均と同等であった学力のレベルが２学年で４上昇し、県平均の伸びを上回った。
○　上位層、中位層、下位層いずれの層も学力を伸ばしている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　深い学びを意識した教材

単に答えを求めるだけではなく、「なぜその式を立てるのか」「なぜその答えにたどり着くのか」を大事にしながら取り組んでいる。教員が表面的な知識及び技能を問う問題だけでなく、思考力、判断力、表現力等を深める発展問題を提示することで、生徒に既存の知識を活用して考える習慣が身に付き、学力の向上につながったと考えられる。

イ　知識・技能を定着させる時間の充実

基本的な知識及び技能を身に付けるために、じっくりと演習問題に取り組む時間を確保した。

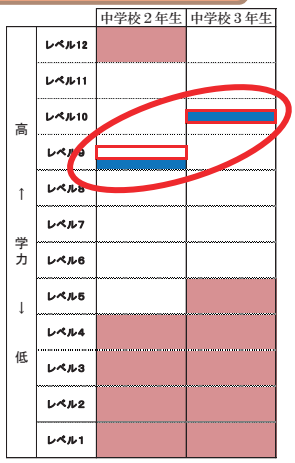
授業の流れを、①「全体で教科書の問題に取り組む」②「類題を集めた演習プリントに取り組む」③「定着が図られた生徒は、さらに発展問題に挑戦する」という型で展開させている。この基本的な流れがあることで、生徒が「次に何をするのか」を理解した状態で授業に臨めている。

また、理解が難しい問題があった場合は、近くの生徒同士で教え合いや教師による机間指導で個別指導を行っている。

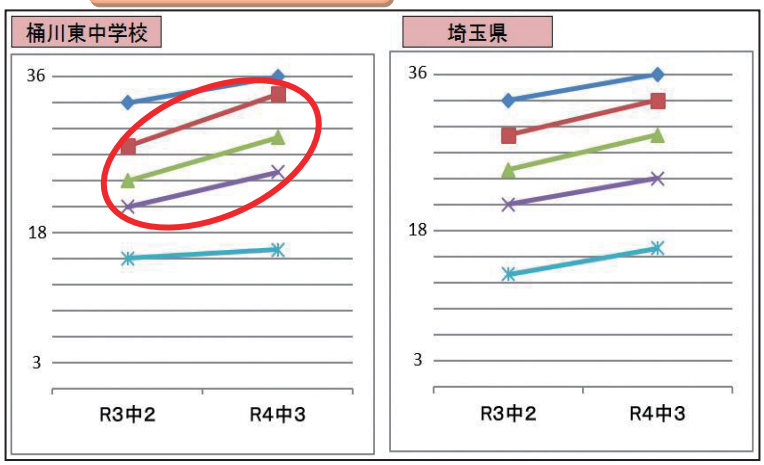
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　２学年から３学年にかけて、学力のレベルが４上昇し、県平均の伸びを上回った。
○　上位層、中位層が学力を伸ばしている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　基礎・基本の定着を図る活動

帯活動として既習事項の基本文の Input 活動を行っている。繰り返し練習を行うことで、基礎・基本の定着を図った。課題解決を目指したペア活動にすることで主体的に学習に取り組む意欲を高めることができたと考えられる。

イ　自己表現活動の場面設定

教科書本文の内容理解を行った後、自分の言葉で内容を伝え、さらに自分の考えや気持ちを表現する活動を行っている。話すことと聞くことから書く活動へつなげることで技能統合型の学習をすることができ、「英語で伝えることができた」という表現力の向上につなげることができた。

学校全体での取組

ア　学校課題研究の取組

本校では、「何をどう学ぶのか」「何ができるようになるか」を考えることを、授業をデザインするというキーワードを使い、全教科で実施することとした。その際に、NITS が示したピクトグラムを活用して教員も生徒も学習の見通しや、３つの学び（主体的な学び・対話的な学び・深い学び）をイメージ化できるようにした。

独立行政法人教職員支援機構（NITS）HP より

イ　チャレンジテストの実施

学校課題研究「学習環境部」の取組の一つとして、学力向上を目指し基礎的な内容の定着を図る目的で定期的に、朝学習の時間（10 分間）に５教科のテストを実施している。

基礎的な内容のテストを実施するとともに、家庭学習について指導し、多くの生徒がこの取組を通して学習意欲を高め、達成感を味わえるようにしている。また、学級で学習に意欲的に取り組む雰囲気をつくり、学校全体で学力向上を図っている。

川越市立城南中学校の取組

1　本校の概要

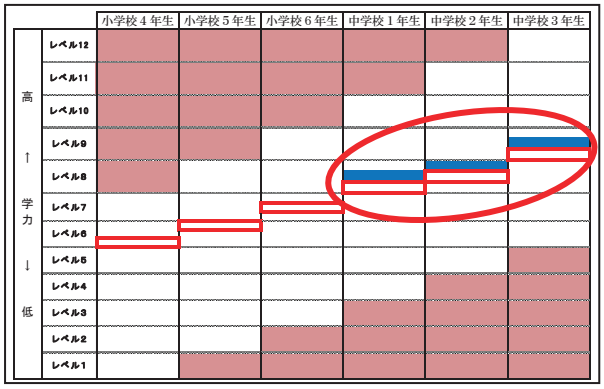
本校は、近年再開発されつつある川越駅西口周辺からウエスタ川越を含む川越市中心部の市街地に位置していて、国道 16 号や川越所沢線が走り、交通の利便性も高い地域である。また、台地の外れにあり、校舎の窓からは、遠くスカイツリーや秩父山地、富士山も望むことができる。川越第四中学校として開校して 76 年目を迎え、18 学級 587 名の市内で一番大規模な学校である。生徒たちは、「絆をつよめ　共に高め合う　心豊かな生徒」を学校教育目標として、今年度は、「心・眼・体を向けて」をキャッチフレーズに日々の授業はもとより、学校行事や部活動にも活発に取り組んでいる。来年度からのコミュニティースクール移行をふまえ、生徒は良き伝統を受け継ぎ、地域との交流も深めながら学校生活を送っている。

2　令和３・４年度の結果

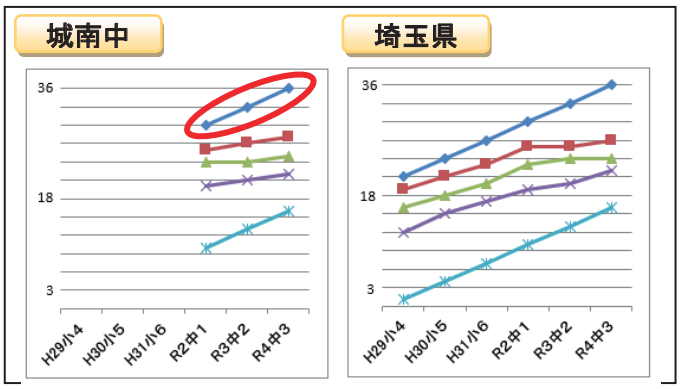
中学校１年生→中学校３年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　上位層は県平均と同様の伸び率を維持し、６段階高くなっている。

○　中間層では、県平均より高い伸び率を維持し、中１～中３まで着実に高くなっている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　３学年共通で行っている継続的な漢字練習

・毎時間、はじめの５分間は漢字ドリルを用いて漢字練習→小テストを実施している。年度当初の教科部会において、全学年で共通の教材を選択し、３年間を見通した授業展開を計画している。

・小テストにて満点を取れる生徒に対しては、さらに別の熟語練習を実施している。

・短時間でも継続することで、習熟度に関わらず確実に習得できるよう取り組んでいる。また、漢字練習や小テストの時間に机間指導を行うことで、学習支援の機会を増やしている。

イ　４人組で行う活発なグループワーク

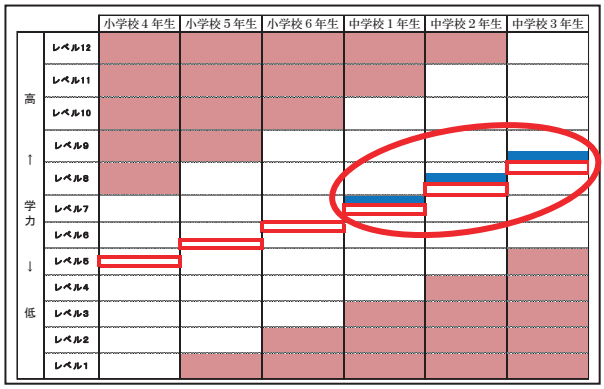
・日頃から４人単位で話し合い、自分の意見を伝えやすい人間関係や環境づくりの機会を増やすことで、活発な意見交換が実現している。この言語活動については、国語科だけの取組ではなく英語や理科等の授業でも同様に機会を増やしている。

・グループワーク後は全体で共有する時間を設けて、個々がさらに広い視野を取り入れられるよう取り組んでいる。最近ではＩＣＴ機器を活用して全体共有する場面も増えてきている。

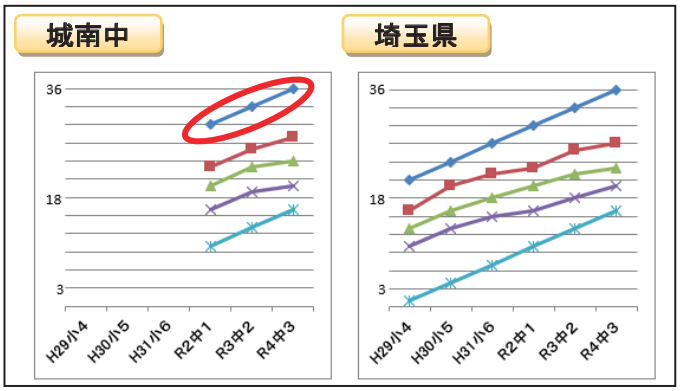
中学校１年生→中学校３年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　上位層は県平均と同様の伸び率を維持し、６段階高くなっている。

○　中間層では、県平均より高い伸び率を維持し、中１～中３まで着実に高くなっている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　主に授業時間に行っている取組

・「今までとどこが違うのか」「今まで習ったことを使うと…」という２つの視点を授業中にもたせ、既習内容の積み重ねを意識させることで常に考える姿勢を持つ機会を増やしている。

・授業の中で伝え合う活動を多く取り入れて、知識の習得のみならず、学んだ知識を自他で共有し、活用する方法をそれぞれが工夫する過程を通して学習内容の定着を図っている。

・解き方について、どのように考えたのか思考の流れを説明する時間を設けている。また、別の解法を探す時間を設けることもある。

・板書方法の工夫として、ノートの右側にメモ欄を設けて、一方的に授業を聞くことに留まらず、授業中の気付き等を書き留められるよう指導している。これにより授業の振り返りが行いやすく、授業時間外（主に授業後の休み時間）に教員へ質問する生徒が増えてきている。

・定期試験後に解き直しを実施し、個々の理解度に合わせた取組を通して、個別指導の充実を図っている。

・発展的な問題や入試問題に挑戦する機会を増やすことで、自己の学習の振り返りを行っている。また、１、２年生の既習内容の確認や復習も兼ねている。

・演習の時間には単に問題集に取り組ませるのではなく、自分に合った内容や難易度を選択できるよう工夫している。

学校全体での取組

ア　「川越授業スタンダード」の深化（学力向上＝授業改善×学級つくり）

・「めあて」「見通し」「学び合い」「まとめ」「振り返り」の流れを定着させるとともに、「主体的・対話的・協働的な学び」を実現する手立て、活動を大切にする。特に１時間の「めあて」「まとめ」をはっきりさせることで、習熟度や理解度に関わらず全員が本時で学ぶこと、学んだことへの意識を共有している。全教室に共通マグネットカードと大型デジタルタイマーを設置している。

イ　信頼関係の構築

・生徒の３分前着席と同様に、教員も授業開始３分前には教室等にて待機している。その時間が、休み時間中の自然な質疑応答につながり、授業への関心・意欲や互いの信頼関係の基盤となっている。一人一人を大切にすることで、安心して発言ができ、学び合える雰囲気を作り出している。

深谷市立川本中学校の取組

1　本校の概要

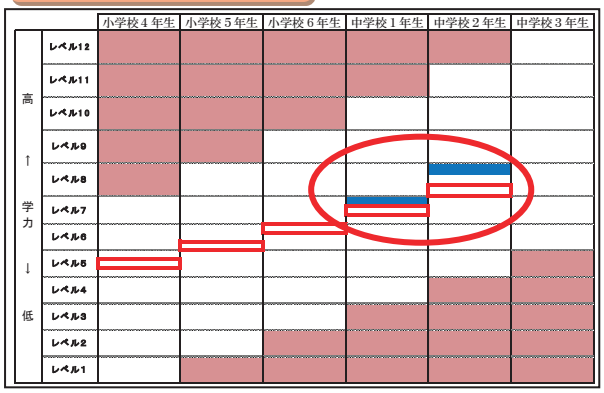
本校は、深谷市内を流れる荒川沿いに位置し、豊かな自然に囲まれた学校である。全校生徒数 285 人、学級数 11 学級の中規模校である。学校教育目標「自ら学ぶ意欲と、豊かな心を持ち、主体的に行動できる、たくましい生徒の育成」のもと、「チーム川本中」を掲げて組織的に教育活動に取り組んでいる。本年度重点指導の項目の１つとして、「知的好奇心を高め、学力の向上を目指す」を設定し、授業研究を重ねたり、朝学習を取り入れたりして学力向上の推進を図っている。

2　令和３・４年度の結果

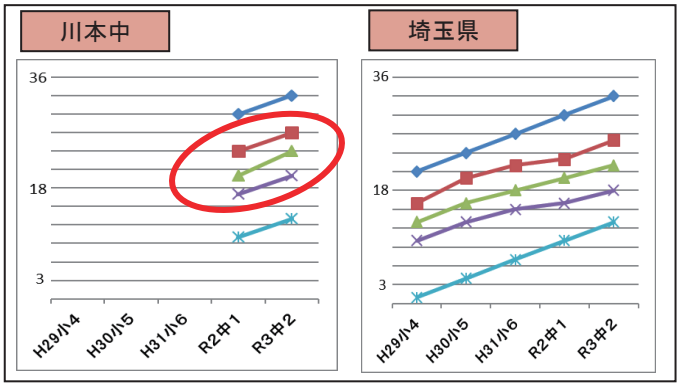
中学校１年生→中学校２年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　学力の伸びが県平均を上回るとともに、中位層の伸びが大きい。

○　学力を伸ばした生徒の割合が 76.8%で、全体的に学力を伸ばすことができている。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　本時の学習目標とまとめを提示

各教室に「学習目標」と「まとめ」のカードを準備し、各授業で活用できるよう工夫した。本時の目標を毎時間板書し、その目標をノートや評価カードに記入する習慣をつけ、授業の目標を明確にするとともに、授業の見通しが立てられるようにした。また何を学んだのかがわかり、授業の最後に振り返りができるようにポイントをまとめた。

イ 自力解決･練習問題の時間の確保

課題に取り組む時には、自分でじっくり考える時間を確保した。その間、机間指導を通して評価や助言をし、自分の考えに自信をもたせたり、少しでも意欲的に取り組めるよう促した。

また、演習を通して学力が定着するよう練習問題に効率的に取り組めるようにした。授業の始めの５分間に復習問題を解く、宿題を定期的に課す、家庭学習用のプリントを廊下に置いておくなどして、機会をとらえて練習問題に取り組む時間を与えた。

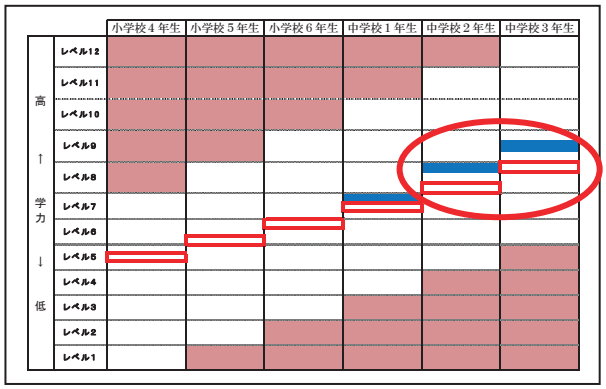
ウ 定期テスト前の補習時間の設定

定期テスト前の部活動中止の期間に、自主的に学習したり、わからないところを質問したりする時間を設定した。先生に質問しやすい雰囲気を作るとともに、生徒同士で互いに学び合い、学習に向かう士気を高めた。

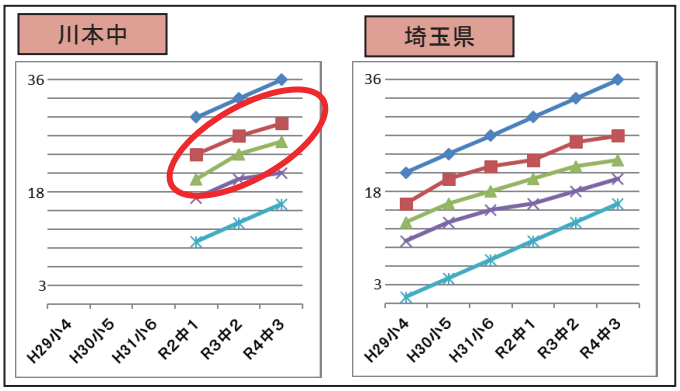
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【数学】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　学力のレベルや学力を伸ばした生徒の割合ともに県平均を上回っている。

○　中上位層の学力の伸びが特に大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　仲間と学び合う活動を意識した授業

自分の考えが書けた生徒には、全体で分かりやすく説明や発表することを意識させた。また、まだ理解できていない生徒に対して考え方や解き方を伝えるよう指示し、生徒同士が互いに学び合えるような時間を設けた。低位の生徒も質問しやすい状況になるとともに、上位の生徒は考え方を伝えることの難しさを感じたり、より理解を深めたりしている。

イ　基礎的・基本的事項の徹底を図るための朝学習の活用

川本中学校では、朝の 10 分間を週３回、朝学習の日としている。数学は毎週水曜日と設定しており、そこで**基礎的・基本的**な内容を繰り返し復習した。前週の朝学習で取り組んだ内容について、次週テストを実施し確認させた。また、テストで基準に達しなかった生徒には補習を設け、個別指導を行った。

ウ　生徒主体の委員会の取組

学級委員を母体とした学年委員会で、常に授業や家庭学習に対する取組を実施してきた。家庭学習を皆で取り組むための方策や、基礎的な知識を身に付けられる方法を考案し実行してきた。例えば、帰りの会で週１回各教科の小テストを実施し、全問正解の枚数をクラスで競うなどの取組を実施した。

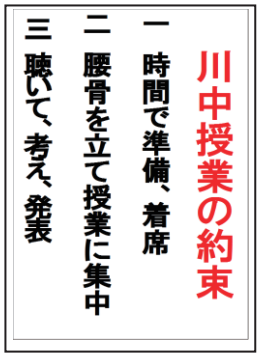
学校全体での取組

ア　朝学習の取組

前述のように、川本中では週３回を朝学習に当てている。月曜日が英語、水曜日が数学、金曜が国語とし、全校でこの取組を行っている。特に国語に関しては、月１回校内漢字検定を設定し、その合格を全校で目指している。そのような取組が他の教科にも波及し、数学や英語も学年ごとの取組ではあるが合格できるよう努力する生徒が多い。

イ　学習規律の確立

各教室の前壁には「川中授業の約束」が掲示してあり、学習規律が確立できるよう意識付けをしている。チャイムで授業が開始できる雰囲気があり、落ち着いた教室の中で授業が実施できている。



春日部市立葛飾中学校の取組

1　本校の概要

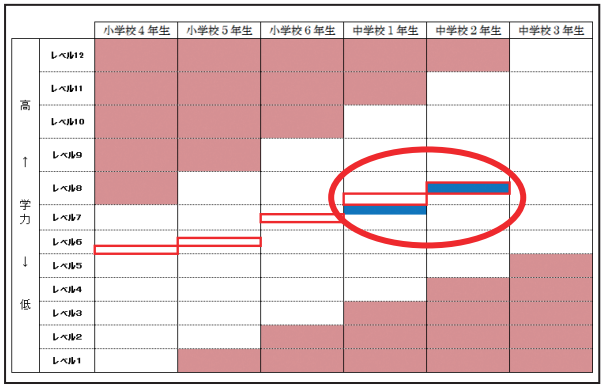
本校は、全校生徒 523 人、学級数 17 学級の中規模校である。学校教育目標「自ら考え実行する生徒」のもと、「学力を高める」「心身を鍛える」「進んで働く」「物を大切にする」生徒の育成を目指し、教育活動に取り組んでいる。また、研究課題を「主体的、協働的に学ぶことがうれしい授業づくり」とし、単に「楽しい」で終わらず、「分かる」「できる」が「うれしい」授業づくりに、全教職員を挙げて取り組んでいる。

2　令和３・４年度の結果

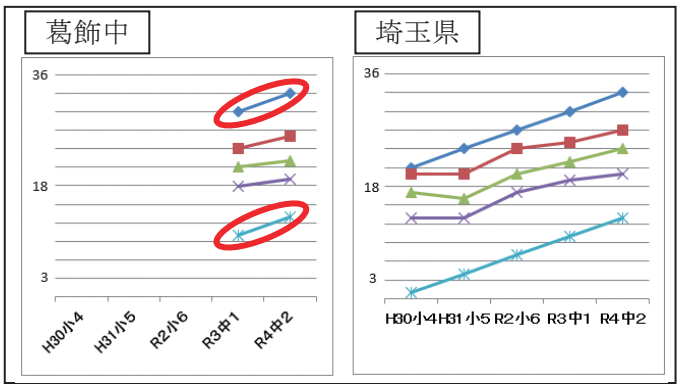
中学校１年生→中学校２年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　学力の伸びが、県平均を上回っている。
○　学力を伸ばした生徒の割合が 72.4％と高く、特に上位層の伸びが大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　自己学習から始まる授業

毎時間の開始前に新出漢字の練習プリントを配布し、各自が漢字練習に取り組みながら授業を開始している。各自が自分の課題と向き合いながら、落ち着いた雰囲気で授業を開始することができている。また、５回毎に小テストを行い、スモールステップでの達成感を味わわせ、国語の授業に対する意欲を引き出している。

イ　小グループでの学び合い活動

毎回の授業時に、３～４人の小グループでの学び合い活動を取り入れている。「自力解決 → 小グループでの学び合い → 全体での交流」の流れを基本とし、各ステップで深い学びができるよう課題を設定している。黒板等で生徒に考えを書かせる場面では、難易度が様々な問題を用意し、誰もが前に出て、発表しやすい雰囲気を作っている。また、音読等の練習も少人数で行うことで、学び合いやすい人間関係を醸成している。

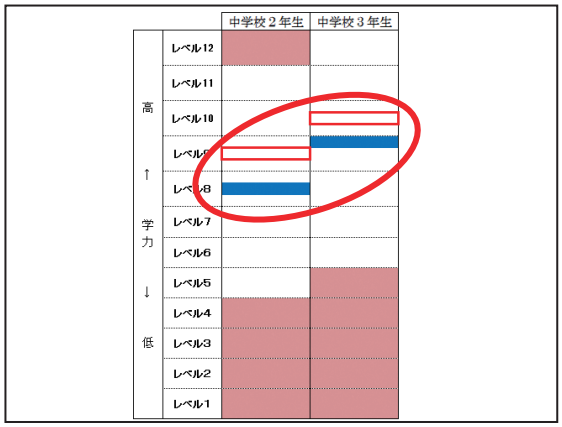
ウ　単元の振り返りの工夫

単元の振り返りの際には、その単元で学んだことを 200 字程度の文章にまとめさせている。自分の生活と関わらせながら文章を書くことで、単元を振り返りながら自己を表現する場としている。生徒が個人で書いた文章は、互いに発表し合うなど、他者のよさに学ぶ機会も設けている。

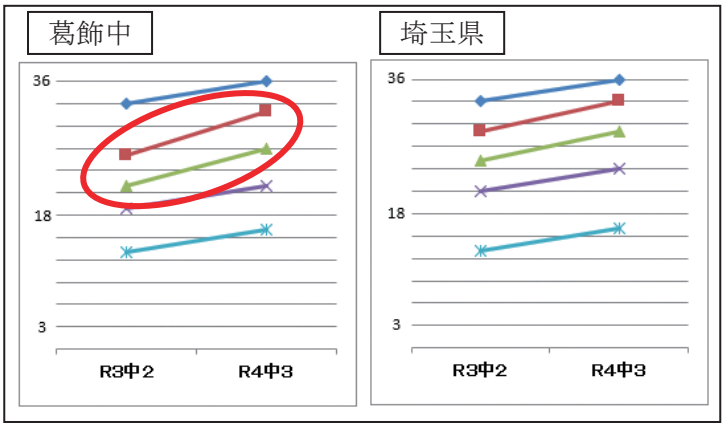
中学校２年生→中学校３年生の取組

（１）学力の伸びから見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



○　学力の伸びが、県平均を上回っている。
○　学力を伸ばした生徒の割合が 88.1%と高く、特に中位層での伸びが大きい。

（２）伸びを引き出した効果的な取組

ア　単元内の流れを統一した指導計画の作成

各単元の授業を計画する際、全単元が同じ流れで進むように計画をしている。「文法事項 → 教科書本文の内容 → 文法の小テスト → 英作文 → コミュニケーション活動 → 単元テスト」の流れを全単元で統一することで、生徒たちにも学習の見通しをもちやすくさせている。今、何を学んでいるか、次に何をやるかを生徒に提示することで学習への意欲が高まった。英作文を書く活動においても既習事項を活用して書く生徒の姿が多く見られた。

イ　テスト後の振り返りと評価の充実

定期テストの返却後に、学び直しをする期間を設けた後、全生徒に再テストを実施している。再テストがあることで、テスト返却後の振り返りが充実するようになった。分からなかった部分を確認したり、自分の得意や苦手と向き合ったりする姿が見られている。また、２回のテストのうち、１回目は fluency（流暢さ）を重視、２回目は accuracy（正確さ）を重視した採点をすることで、異なる観点から生徒を評価し、その後の指導計画に反映させることができている。

学校全体での取組

ア　「葛中５つの授業規律」の策定

「学ぶことがうれしい授業」をするために、生徒が最低限守るべき授業のルールを明確化し、全校で取り組んでいる。継続の結果、授業規律が確立し、集中して学べる環境が整った。

イ　ＩＣＴの活用に関わる校内研修の充実

各教科・領域において、ＩＣＴ機器の効果的活用を促進するために、計画的な校内研修を行っている。各学年・教科での取組を共有したり、導入された学習支援ソフトの活用方法等を周知したりと、年度を越えた取組を継続している。結果として全学年・教科において、授業におけるＩＣＴ機器の積極的な活用が促進されている。生徒の意欲を引き出し、対話や深い思考を促すためのツールの１つとして、各教員がＩＣＴ機器の活用を選択しやすい環境が整ってきている。

葛中5つの授業規律

1　あいさつをしっかりする
2　チャイム前着席を守る
3　人の話をしっかり聞き
　　しっかり発表する
4　授業の学習に集中する
5　忘れ物をしない